

県内主要キュウリ品種における各種病害発病の品種間差					
<p>[要約] <u>キュウリ品種</u>「ちなつ」、「極光607」、「カレラ」は「ハイグリーン21」に比べ<u>褐斑病の発病程度</u>が低い。一方、<u>つる枯病</u>、<u>炭疽病</u>、<u>べと病</u>の発病程度は、「ハイグリーン21」と同等～やや高い。</p>					
佐賀県農業試験研究センター 有機・環境農業部・病害虫農薬研究担当			連絡先	0952-45-8808 nougyoushikensenta@pref.saga.lg.jp	
部会名	野菜	専門	病害虫	対象	キュウリ

[背景・ねらい]

近年、施設キュウリ栽培において、褐斑病に対し耐病性を示すとされる品種が導入され、褐斑病による被害が減少している。しかし、これら品種の栽培圃場では従来発生が少なかった炭疽病やつる枯病による被害を生じる場合があり、減農薬栽培において当該品種を使用する場合には、品種の特性に応じた新たな防除体系を組み立てる必要がある。このため、接種試験により各品種における各種病害の発病程度を明らかにする。

[成果の内容]

1. キュウリ褐斑病の発病程度は、「ハイグリーン21」に比べ「ちなつ」、「極光607」、「カレラ」で低い（図1）。
2. キュウリつる枯病の発病程度は、菌株間で異なるが、「極光607」は「ハイグリーン21」より高い（図2）。
3. キュウリ炭疽病の発病程度は、供試したすべての品種で同等である（図3）。
4. キュウリべと病の発病程度は、「輝世紀」でやや低いものの、「ちなつ」、「極光607」、「カレラ」、「セレクトⅠ」では「ハイグリーン21」と同等である（図4）。

[成果の活用面・留意点]

1. 「ちなつ」、「極光607」、「カレラ」においても、つる枯病、炭疽病、べと病が発生する恐れがあるため、保護殺菌剤等による薬剤防除が必要である。

[具体的なデータ]

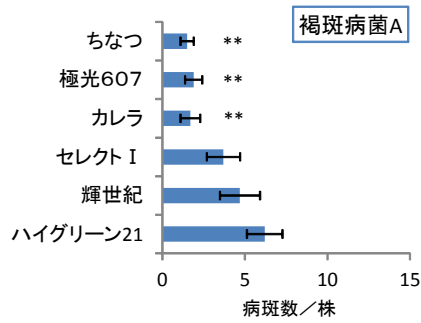


図1 キュウリ各品種における褐斑病の発病程度^{a)}

a)本葉1.5葉期のポット苗(1品種5ポット、2反復)に 10^4 個/mlに調整した供試菌の分生子懸濁液を苗全体にハンドスプレーで噴霧接種し、接種10日後に各苗の本葉2枚における病斑数を調査した。**はDunnettの多重比較検定により1%水準でハイグリーン21との有意差があることを示す。褐斑病菌A: 2010年3月小城市現地より採取。

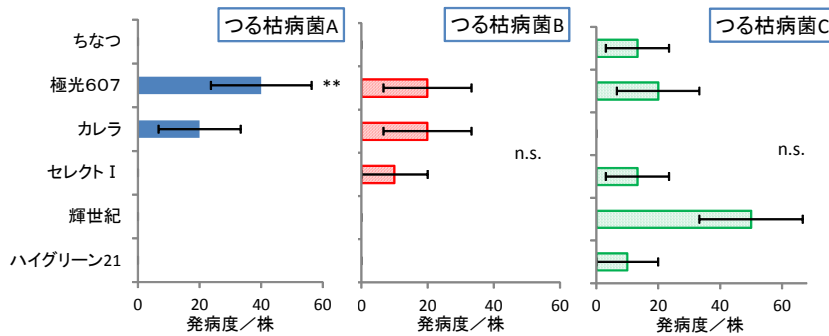


図2 キュウリ各品種におけるつる枯病の発病程度^{a)}

a)本葉2葉期のポット苗(1品種5ポット、2反復)に 10^6 個/mlに調整した供試菌の柄孢子懸濁液を地際部の茎にハンドスプレーで噴霧接種し、接種20~29日後に各苗の茎における発病度を調査した(発病度1:茎の周囲1/3以下の病斑、2:茎の周囲1/3~2/3の病斑、茎の周囲2/3以上の病斑)。**はDunnettの多重比較検定により1%水準でハイグリーン21との有意差があることを示す。つる枯病菌A~C: 2011年2月白石町現地圃場(極光607)。

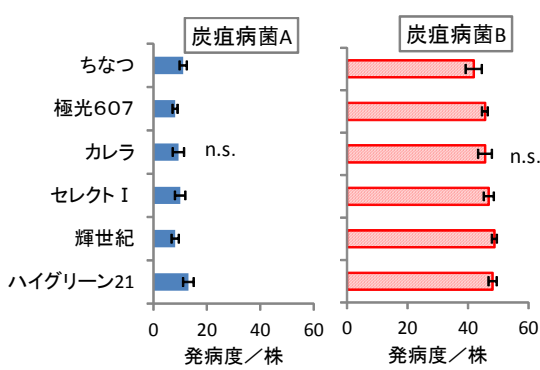


図3 キュウリ各品種における炭疽病の発病程度^{a)}

a)本葉2~3葉期のポット苗(各品種5ポット、2反復)に 10^4 個/mlに調整した供試菌の分生子懸濁液を苗全体にハンドスプレーで噴霧接種し、接種10日後、各葉における発病指数を調査し、発病度を算出した(発病指数1:病斑面積が葉面積の5%未満、2:病斑面積が葉面積の5~25%、3:病斑面積が葉面積の25~50%、4:病斑面積が葉面積の50%以上)。n.s.はDunnettの多重比較検定により5%水準でハイグリーン21との有意差がないことを示す。炭疽病菌A、B: 2011年11月武雄市現地(極光607)より採取。

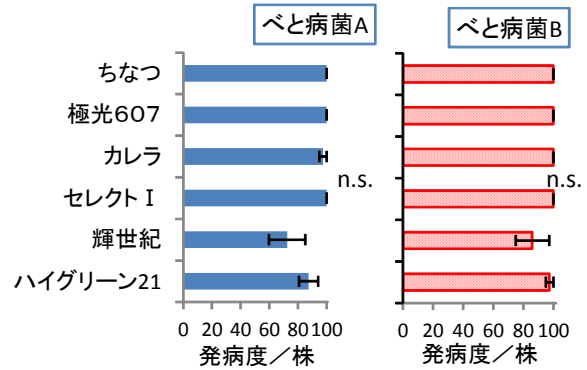


図4 キュウリ各品種におけるべと病の発病程度^{a)}

a)本葉1.5葉期のポット苗(各品種5ポット、2反復)に 10^4 個/mlに調整した分生子懸濁液を第1葉の葉裏にハンドスプレーで噴霧接種し、接種20日後に各葉における発病指数を調査し、発病度を算出した(発病指数1:病斑面積が葉面積の5%未満、2:病斑面積が葉面積の5~25%、3:病斑面積が葉面積の25~50%、4:病斑面積が葉面積の50%以上)。n.s.はDunnettの多重比較検定により5%水準でハイグリーン21との有意差がないことを示す。べと病菌A: 2011年11月佐賀市現地(カレラ)、B: 2011年12月佐賀市(極光607)より採取。

[その他]

研究課題名: キュウリの特別栽培が安定的に継続可能な減農薬総合防除体系の確立

予算区分: 国庫

研究期間: 2011~2013年度

研究担当者: 古田明子、衛藤友紀、稲田 稔